発行月：平成 30 年 12 月　家族新聞　第 574 号

環境教育「まず、今できることから」

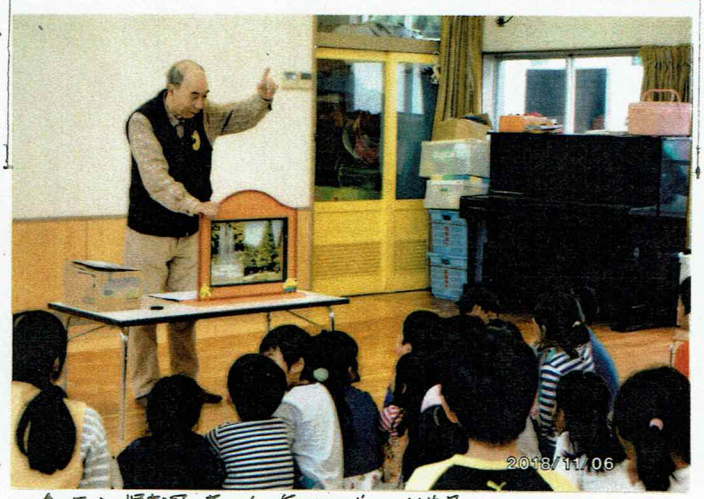
歴史に学ぶ

発行所：地域環境活性化協議会
編集者：代表幹事　髙橋賢一
連絡先：市民活動支援センター
尾張旭市渋川町三丁目5番地7
（渋川福祉センター内）
TEL 0561-51-2878

〝マイクロプラスチック キャンペーン〟のダーウィンは後輩の言葉を残しているという。「進化論」への仲間たちの生き物に対して…よいことをしてやれなかった〉地中のミミズから赤道直下の鳥たち、さらに植物まで、実に幅広く生物を研究した生物学者である。人類史に残る成果を入れてもたらした半面、生き物にはお返しができなかった。そんな思いだろうが、それではわれわれは生き物に何を返しただろう。

世界自然保護基金（WWF）が最近発表したリポートに驚く。一九七〇年から四十年余りで地球上の脊椎動物の数は60％も減そうだ。特に中南米が顕著なのだという。生息環境が悪化したり、失われたりというのが大きな理由だ。気候変動もそこに加わる。リポートによれば、地球が「大加速時代」に入っているのだという

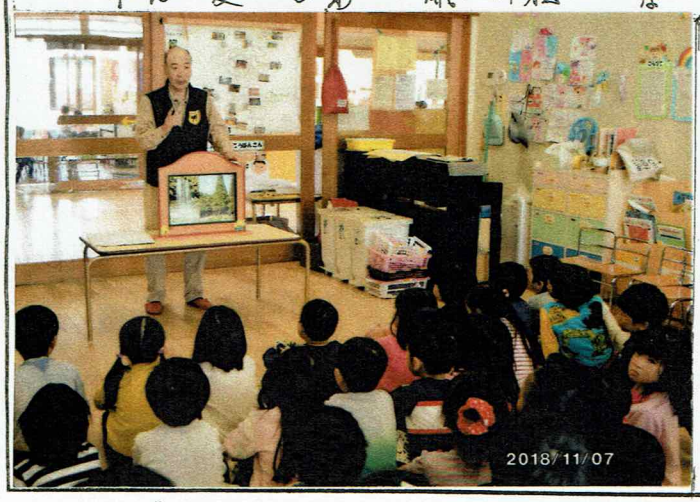
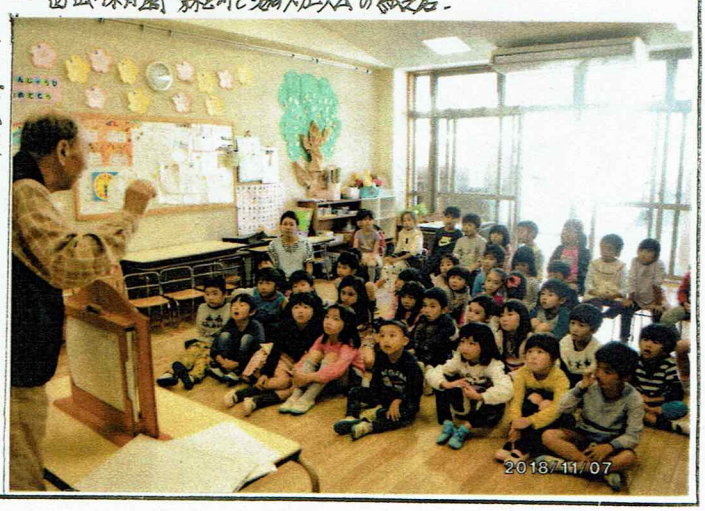
▲人口、水やエネルギーの利用量、漁獲の量、消失した熱帯雨林の広さなど、環境に厳しい数々の要素がそろって過去になく急な右肩上がりを示している。



▲西山保育園　森と川と海のメカニズムの紙芝居

野生生物の急減はその結果だ。同じ問題をテーマにする生物多様性条約第十四回締約国会議（COP14）もエジプトで開かれる。さんざん生き物の世界を利用してきたわれわれにどんなないことができるのか。これまでの不明を反省しつつ、加速すべきは足機意識だとわが身に言い聞かせる。

▲西山保育園



▲藤池保育園　微小プラ人の体内にも　日本含む8カ国便から検出